

トワイライト氏のとある一日

(真作と麿作と松葉を喰む河馬)

「ねえ、井戸の、井戸のや」

「なにかな。梟殿」

子供の頃から見慣れすぎていて殊更語る必要を感じない女と、こちらもそろそろある程度見慣れてきてしまった女とが話している。後者についてはあまり、よろしくない。なぜこの女思い出したようにこの家によつてくるのか。向こうがなにを考えているのだから知る由もないが、こちらとしては叫ぶならずつと忘れていた。

「さっきのあれなんだけどな。もう一回見せてよ」

不変のものについて今更なにを觀察することもないのだが、暇だったのでたまたまそちらを見るともなしに見ていた。透き通るような柔らかい頬は纏った布地の赤色が映えて僅かに普段よりも血色良く思える。

なにひとつやることがないのならば、とりあえず彼女を眺めていれば暇は潰せるといった具合。梟をじつと見ていると、子供の頃は地図屋になりたかったことを思い出す。

ある日ふと、高価な地図の端にとても小さく、『この地図に誤りがあればご指摘ください』と書いてあるのに気付いてまさかそんなことがあるとはと驚いたのだ。地図は世界とイコールであつて、揺るぎないものだと思っていた。そこに間違いを含んでいる可能性があるということに衝撃を受けて、よし大きくなったら地図屋になって絶対正確な地図を作つてやるんだとか浅はかにも思つたのである。今だつて多少、考えないでもない。なんであれ

彼は地図屋にならなかつたから、地図にはきつとまだよくよく見れば不完全だという部分があるのに違いない。だつて未だにそう書いてある。そして意図的な嘘を含む場合もあるということも知つている。確かなはずのものにも、純びがあるということについて、幼い自分が実感したのが地図屋のエピソードである。

そして、ならば身近にある完璧にしか見えない芸術品にもよく見なければわからない欠点があるのかもしれないと考えて、それを指摘できるとしたら自分ただ一人だと燃え上がつて熱心に觀察していたのだが結局のところはなにをどうしたところで瑕疵など存在しないとすぐにわかつた。だから彼女には、どんな小さな字の但し書きもいらぬ。完璧とは本来傷のない寶石を意味する言葉らしいが、その通りだ。

つまるところそんな感じで、外見上の造作を一言で片付けるなら掛け値なしの美女。しかし言動には最低でもマイナス十歳が必要だ。大人の顔に幼児の表情をして梟はイドの袖を引いている。

せがまれたイドは、余裕のある中にも多少の困惑を滲ませた笑顔で、はぐらかすように首を傾けた。

「あれという」と

小さな子供に話しかけるような口ぶり。正確には、玉座に座つたまだ幼い王様の傍で、教育者面して何事か企む悪い大臣とか、その手の輩にしか見えない。

しかし間抜け、と心の中で付け加える。蚊帳の外で成り行きだけ見守つているトワイライトはまた一枚手元にカードを立てた。

全然やる気なく適当に作り始めたところ案外うまくいっているトランプタワーは順調に三段目に差し掛かっていた。いつ崩れてもいいやと思うと意外と崩れないものである。まあ誰も見ていないしどうでもいいのだが。

「あれだよ、あれ。あの凄いの見せてよ」

「しかし梟殿。交換には応じぬと言われたのではなかったか？」

梟の宝箱の中のものならかの目玉品について。自分の持つてきた物品と交換しないかと性懲りも無く持ちかけていたイドだったが、梟は散々迷った末に『今日はやっぱりダメだけどまた今度考えるかもだからそれ絶対とつといて』と王者の結論を出した。長い白い後ろ髪を相当引かれまくっているのは明らかであつたのだが、しかしイドが自分の持つてきた服を着て見せてくれないかと思ひ引き続き別件の交渉に入つたのでいつの間にか忘れてらしい。なおその真紅のドレス一式については梟は全然興味を示さなかつた。イドはどちらかと言えばこちらが本命だつたのだからどうかと疑われる熱心さで説き伏せていたのだが、実に変態である。有罪^{ギルティ}。なんの弾みで梟がその唾つけた品について思い出したのだから知らないが、交渉は今また再開していた。

「うん……交換は、できない。でも見たい。見るだけ。ねっ、見るだけだからさあ。いいだろ？見るだけ！」

露骨に甘えた声を出す梟。そのきらきらした瞳の輝きを見れば、交換する気は無いがイドの分だけ奪い取る気は満々である。どの程度の自覚があるのだから知らないが。振り出しに戻つたどこ

るかドツボに嵌まりつつある交渉の行方にこっそり溜息をつく。イドもそれは察しているらしく、微笑んだままやんわりと躲そうと努力してはいる。

「本当に見るだけで済まされるかな？いつもそのように最初は言われるが……」

「んー、ちよつと触つてみたくなるかもしれない。それくらいはいいだろ？ちゃんと返すよ。返すからさあ。見せてよお。ねえ井戸の、いいだろおー」

うっかり渡せば懐に仕舞われるのは間違いなく、欠片もいわけないのだが、梟はなんの疑問もない顔でかわいらしく小首を傾げ、そんなことを言い切つた。

彼女が誰にも彼にも彼にもこうなのかというまあこうだが、それでも程度の差はある。なおこれはかなりひどい方。狙う品物の値打ちを考えるとあまりにもひどい態度と言えよう。多少強引でもこいつ怒らないと判断されているのであり、要するに舐められているのであるが、実際イドは梟にはベタ甘なので間違つていない。諂いとはまた違うのだが一定の敬意表現の姿勢を崩さず、輪をかけて回りとどく喋り薄気味悪い猫撫で声を出す。お姫様の御披露目会に呼ばれた悪い魔女さながらでありほぼそれにしか見えない。皿が足りないとかいうしょうもない理由で招待者のリストから真つ先に名前を削られるタイプで疑いない。呼ばれてないのにやつてくるあたり、非常に似ていると思う。まさか同一人物だつたらどうしよう。

そんな女は微笑みを崩さぬままに上品に眉を擡めてみせ、煮え切らぬ声を出している。

「うむ……しかし……」

「ねえねえ、お願いーおーねーがーいー」

両手を胸の前で組み合わせる梟。昔彼がやっていたのの真似である。半泣きのチビ助がやってもなんの面白味もない仕草だろうが、梟がやればそれなりの説得力があるのかも知れない。すくなくとも目の前の女は明らかにぐらついた。どうしようもない。

「そうまで仰るのならば……御覧に入れるだけなら、構わないとも。呼び戻してもよろしいが、そう、交換条件ではいかがかな？」

梟は立場柄、馬鹿丁寧に扱われるのには慣れている。そしてそれを大体適当に聞き流す。六花の君におかれましては本日ごもご機嫌麗しゅう、と殷勤にやられるよりは、もう飯食った？とでも開口一番聞いた方が仲良くなるには早いのだが、イドは頑なに毎回前者から入る。しかし梟の通り名をよくあれこれ知っているものである。

かといって、初対面から雑に扱うとめちやくちや機嫌を損ねる場合もあるのでこの王様それなりにややこしい。自明の理として自分は偉い人だと思っているので、そこを踏まえぬ輩は不調法だと感じて怒るらしい。本音と建前の見分けがつかない単純頭だが露骨な侮りは直接、死に繋がる。

つまり彼女の凄さを認めた上で、今腹減ってない？と聞く分には構わないのである。そこあたりは匙加減というかなんとい

うか。そこで実際キヤラメル入りのチョコレートでも持っていればほぼ確実にそこその好印象を勝ち取れる。ちなみにこの女の娘は梟の全力の絡みを路傍の石のごとく無視したりするが、なぜか案外覚えめでたい。イドよりよっぽど好かれているので世の中所謂、そんなものである。

案の定、梟は余計な部分はぼささり切り捨てて都合のいいところだけ耳に入れた。両手を挙げて歓声を上げている。

「やったあ！井戸のだーい好きー」

交換条件（たぶん、服の話を蒸し返したかったのだろう）については無視されて見せることだけ決定しているがイドは満足でもない顔をしていて特に不平は述べなかつた。

ちなみに今の『大好き』は包装されたチョコレート類に向けられるものと同義であつて、中身を食べてしまえば外側の銀紙など適当に打ち捨てられるだけののだが、馬鹿馬鹿しいと思っただけのトワイライトは取ってなにも指摘しなかつた。

「見せて見せて。早く見せて！」

「そう急いで。あれは粗略に扱うと機嫌を損ねるのだ。ものには順序というものが……」

「早く早く早くはーやーくー！！」

「先程もお話したが、あなたがあれを眺めると同様に、あちらもこちらを見つめている。まだ譲渡契約は締結していないし、あれは多少奔放にしても良いと思っっているかもしれない。柵に戻ってから我儘を言われても困るのでね、刺激せぬよう、なる

たけ手は触れずご覧いただきたいのだ。御理解いただけるだろうか。

持つて帰った後の心配より、今ここで失われることを嘆けと思ふのだが悠長な女である。

「うんうん、わかったわかった。触らなきゃいいんだろ？ 御託はもういいからさ、あれ見せて、あれ」

「ほ、本当に大丈夫だろうか……」

案の定、早くも剥かれた包装紙の扱ひを受け始めている。ざまあ見ろと思うことすら退屈な茶番である。梟が一番好きなものなど北極星のごとく昔から決まっているのである。いい気味である。ざまあ見ろ。

渋りながらもイドは結局、自分の上着の内ポケットに手を入れた。平たい小箱を取り出して、しかしまだ机には置かない。だが出してしまつたのならもはや梟の術中（というにはあまりにも適当すぎる手管だが）に嵌つており蜘蛛の巣にかかつた蝶に等しい。

小箱は七センチ四方くらいのも、黒っぽいものだった。艶消しの、金属にも木にも見える奇妙な素材。光の加減でびつしりと細かい紋様が浮かび上がり、それは角度によって何重にも別なものになった。文字のようにも単なる幾何学模様のようにも思えるが多分魔法のなにかなのだろう。謎めいてはいたが、不気味ではない。一種の整然とした美しさを持つそれらは上手にかけられたリボンを思わせた。縛られても箱は窮屈そうにしていな。もちろん

ん中身も。

一面のみが透明な硝子張り、イドは先程まではその面を上にして机に出していた。中には白い布が張られ、そこに大粒の寶石がひとつ、収まっているのだった。

燦然と鎮座するというよりは、婉然と横たわっている。零型の裸石。目が合った瞬間微笑んでくるような。そして必ず相手を破滅させる女だと直感する。関つてはいけなないタイプだ。

彼がその宝石の第一印象を思い出す間に、今またイドは小箱を机の上に置く。ただし手は離さない。

梟が喜色満面でそれを覗き込み、彼もまた、さりげなくそちらへ視線をやつた。さつと撫でる程度に。先の彼女の言葉通り、じつと見るのはあまり、よくない気がしたので。

——淡い空色から浅葱色、そして群青色へ。あらゆる青を表現するように、透き通つた石は角度によって複雑に色合いを変え、妖しい光を放つ。真正面を向いているときのみ、星空めいた銀色の輝きが全体に散るのが一番不思議だった。目を凝らせば内包物はなにもないのに、単なる光の屈折と反射だけでは説明のつかない彩りが、瞬いては震え、なにかを語りかけてくる錯覚に陥る。私を攫つて。そう煌めき誘惑する極上の宝石。

「すごいー！」

梟が単純ながらも熱のこもつた賛美の声を発している。彼女は光物が大好きだ。視線は食い入るように青い石を見つめている。施されたカットは細密で、貪欲に吸い込んだ光を無限に弾い

ては、見る者を狂わせていく。羨望、恋慕、果ては共連れの自殺願望。そんな煮詰まった感情をいくらでも向けられることを望み、そしてすべてをつれなく袖にする。この石はきつとそんな性格をしている。蠟燭の下ならもつとたち悪く振る舞うような予感もした。金剛石と同様に、内から溢れる炎を纏うようにして踊るのではないかと。あの光は紛れもなく人の心まで眩ませる。一瞬の眩暈の結果、崖からの転落死というのは珍しくない事故だ。星に手を伸ばせば穴に落ちるのは当たり前なのに。

昼間の室内を満たすだけの長閑な明かりでも際限なく内部で反射させるその輝きは、しかし本来のぎらつきを多少、抑えられているようにも見えた。一枚の硝子を隔てていることがその理由なのだとしたら奇妙だ。そんな程度で淑やかになる玉には思えないのだが。

虜になる人間は掃いて捨てるほどいるのだろうが、それを眺めてうつつりと餓死するよりは、行き過ぎた接吻として飲み込んだ拳句に別の誰かに腹を裂かれて悶死するとか、そんな血腥い末路の方が多そうなのが勝手にした。その色が青ければ青いほど、周囲にふち撒けられたであろう血の色を意識させられる。

「いいなあ、いいなあ、これ欲しい。これちょうだいよ。ねえ、井戸の」

そしてまたここでひとり犠牲者が出そうになっている。やめてほしい。

予想通りの流れではあるがあまりにも気軽に凶々しいことを

言い出した鼻に呆れつつ、しかしその声音には魔性の美に狂った様子は聞き取れずほっとする。トワイライトが口を挟もうかどうかしようか一瞬迷う間に、イドが先に喋った。落ち着いた感じに微笑んではいる。

「御覧になるだけの約束では？お戯れは困るな。私とてこれを持た手放すというのは……」

そんな約束ヒヨコの和毛より軽く吹き飛ばすのは明らかかなのだがなぜ学習しないのかこの女は。なお鼻は完全に本気である。

「お前しつこいよ。なにが欲しいっていうの。あれはダメって言っただろ。なんでわからないの」

むつと眉を上げ鼻が若干機嫌を損ねた様子になる。なぜここまで態度が大きいのかは謎である。

「そのような言い方は人聞きが悪い。私が無理矢理なにか取り上げるようではないか。そんなことはしないし、見たいと仰るものもこのようにお出した。先程気難しいとはご説明したが、本日あなたへの御目文字叶ってこれも喜んでいい。相性は悪くなさそうだ。お譲りすることはできるとも、できるが、私にもなにか得るものがあったてもよいのでは？それはそんなに、割に合わぬ話だろうか？」

「ダメなものはダメに決まってるだろ。なんなの？うるさい。それとこれと今関係ない。別の話じゃないか！」

「交換するのならばふたつは一纏めの話では……いや、それはもういい。では別なものでも。手元にお持ちの、」

「それもダメ気に入ってるから」

「ま、まだなにも言っていないのだが。せめて内容を聞いてからご判断いただけませんか？」

「聞くだけ無駄だよ井戸のいつも話長いからやだ。しかもどうでもいい話」

笑顔でやんわり食い下がるもぼつさり切り捨てられていているイド。梟の態度はだんだん苛つきを増してきている。この場合合理的なのは後者の方である。

「ではこうしよう。あなたはなにも手放さなくて良い。先程もご提案した件だが、一度人間ごっこをされないか？夜会ごっこだ。綺麗な服を着て、髪も整え、靴も履く」

「なんでそんなことしなきゃいけないの」

梟は険悪に唸った。変態の道楽に付き合っつてちよつと着飾るだけでこの化物みたいな宝石が貰えるなら破格だと思っただがお気に召さないらしい。

「美しいものは美しくあるべきだ。飾り気がなくともあなたは比類なく気高いが、添え物があることで際立つものもあると思う。一度でいいのだ。ああいや、本当は何着か着ていたんだけどがそこはそれ応相談というか。ぜひ」

「私は暑いのに服着てる！お前が来るから！譲ってやってるわけ！この上まだあれこれ言う気？だいたいあんな服どうやって着るのかもわからないよ！見るからに窮屈！ばかじゃない！」

もはや怒り出している梟。イドは悲しげに眉を蹙めたが、魔女

の微笑みは絶やさなかった。そしてなお食い下がる。この情熱をどこか他へ向けるとトワイルイトは冷静に言いたい。

「お召しになる際はもちろん手を貸すとも。あなたがご面倒に感じることはなにも——」

「今！感じてる！面倒！井戸のめんどくさいよ。うるさい。なんでそんなにめんどくさいの？なんなのほんと？」

割とひどい言い草だが、相手が相手なのでそんなに同情心も湧かずトワイルイトはまた適当にカードの上にカードを重ねる。梟は苛立った顔で吐き捨てて自分の長い髪を一房肩から払いのけた。きらきらと白い色が宙を舞った。

梟はびしと箱に指を突きつける。意外と今のところ触っていないが、そのあたりも我慢しているので自分はそのすぐく譲歩していると思っっているのかもしれない。そんな鬱憤混じりの不満顔だった。

「私はただこれちょうだいって言うてるだけ！なにが不満なの！」
分からず屋への抗議口調だが誰がそれで納得するのか逆に知りたい。

「梟殿。物事には釣り合いというものがある……」

「けち。井戸のケチ。ずるい！」

抗議は非難に変わった。なにがずるいのかは謎である。理屈などどづくに破綻している。無理が通れば道理はすらすら引つ込むのであり、理不尽はいつだって聳え立つ巨塔だ。更に気まぐれひとつでその上から岩を落としてきたりする。当たると死ぬ。理不

尽とは得てして、そういうものである。

「私の持ち物が私のものであることについて、なんら不当だとは思わない。無論あなたのものにする方法もあるが、それには手続きが必要だ。聡明なあなただ。お分かりだろうか？」

「ごちゃごちゃうるさいよ。私のものは私のものでお前のものはお前のもの。そう言いたいんだろ。どケチ！ひどい！」

真つ当な主張がなぜか批判されている。治外法権を傘にきた悪質なやつみたいなのをされているが、今回はイドはそんなに悪くないはずだった。ここは確かに梟の森だが個人の財産においてはその持ち主が所有権を有するのには間違いはないだろう。ただ無実の罪で死刑にされる恋人を救つて欲しければ身を任せるとか迫るベタな悪役みたいな話し方をするから悪いのである。

「ひどい……だろうか。ひどくはないような。私はなにも、あなたに損をさせようとはしていないと思うのだが……」

「私が好きなら私に得をさせようと思わないわけ？損しないってことはつまり普通ってことだろ！そんなの全然、つまらない！お前はそんなものってこと！気が利いてないよ。得したいの、得！わかんないの!？」

言いたい放題すぎる。舐められてるとかそういうレベルを超えてこの女にやっても怒らないと思われている。暴君つぶりを遺憾無く発揮する梟。因縁つけるだけでは飽き足らず顔をしかめて唸り声を上げている。なにがそんなに不満なのか理解しかねる。

堂々たる態度で森の王様は井戸の底からやってきた青い宝石

を指差した。

「これほしい!!」

直球にも程がある。

「お気持ちはよくわかった」

薄ら笑いで頷いているイド。そんな遠回しな断り方で通じるはずがあるろうか。

「ならちようだい」

案の定即座に手を突き出されていた。胡散臭い笑顔のままで、さすがにかなり参っているようにも見える。

「梟殿……気に入っていただけなのは嬉しいのだ。しかし今あなたが得をするということは。私がマイナスを出すということの意味する。そこにささやかな埋め合わせが欲しいと願うのはそんなに罪なことだろうか。無論、あなたの美貌は十分にそれだけの価値を持つ。だから私なりに飾らせていただきました」

「ほら自分だけ得しようとしてる！ずるい！」

回りくどい話をあつさり遮られた上卑怯者の誘りを受けるイドは馬鹿としか言いようがない。自分で損得の話蒸し返してどうする。平素拘る点を刺激された梟は謎の理屈で追撃を行った。眉を吊り上げて怒る。

「損したくないってつまり自分ばかりいいとこ取りしようってことだろ！そんなこと言う方がおかしい。おかしい話。騙されないう。悪いと思うならこれちようだい」

「騙す気など毛頭ない。ご気分を害したのなら謝ろう。申し訳

なかった。しかしそれとこれとはまた別ではないだろうか？」
なにを言っても難癖つけられる運命のイドはもはや哀れである。

「言い逃れする気！」

終始一貫して言ったもん勝ちにめちゃくちゃなことを並べているのは梟なのだが彼女は正義は我にありと信じて疑っていない顔をしている。強いものが正義ならばそれで間違っていないかもしれない。なんであれイドの旗色が悪いのは明白だ。しかし物が物だけにさすがに無条件降伏はしたくないだろう。イドも懇懇無礼な印象の笑みは絶やさず、まだ折れはしなかった。

「まさか。私はこうして、話し合いの席についているではないか。逃げも隠れもしないよ。底意はないとどうしたら信じていただけ？ただ正当な取引をしたいただけなのだ。痛くもない腹を探られるのは些か、悲しいな。なにかお気に障るかな？」

まずはその猫撫で声と薄笑いをやめるべきではないだろうか。梟によく聞き取れるようにとの配慮だろうが、普段よりゆっくり喋るのも余計怪しさを煽る感じがする。全然信用されないのはそれが原因なのだがなぜこんな変な役なのだろう。彼が覚えている限りの初対面時との印象ともまた違おうし、自分もそうだがこの女相手と時と場合によりかなり態度が変わる。どこであろうと胡散臭いには変わらないのだが。

「ごちゃごちゃ言わずにこれを寄越せばいいんだよ。ちようだいちようだいちようだ！これほしい！これちようだ！！」

駄々っ子はついに容赦のない恐喝を行った。血も涙もない。どうせ相手の話もろくすっぽ聞いていない。

毎回きちんと手土産まで持つて来るイドがなぜここまでひどい仕打ちを受けねばならないのかは謎である。もうすこし懐かれてもいいような気もするのだが。舐められるにも程がある。

「ここに至るまでお手を触れず、私からの譲渡の宣言をきちんと求めるあなたには理性と誠意があると思っている。だから提案する。私にも納得のいく取引にさせていただきたい。大切なものをお譲りするのだから、なにか記念が欲しいのだ。わかつてはくれまいか」

散々無理無体を叩きつけられてもめげずここまで言われればちよつと服くらい着てやれよと言いたくなってくる。相手は変態だがまあ、見るだけなら減るものでなし。

しかし梟はそんな斟酌しないのだった。いーつと歯を剥いて威嚇するだけだ。

「強情つ張り！一体どうしてほしいの。おかしな話だよ！」

おかしいのはあんただ。

そろそろ喉元まで出かかった突つ込みをかるうじて飲み下すトワイライト。

彼は傍観者に徹しようとしていたのだった。余計な手出しは無用だった。今なにか言えばイドの援護になってしまう。きいきい言っている梟はこちらには目もくれない。このめらめら燃え滾る物欲に駆られた目つき、やはり宝石の魔力に取り憑かれているの

だろうか。いや、いつもこんなもののような気も。どつちだろう。「臬殿。いくらあなたが相手でも、さすがにこれは鉛玉みたいに渡せる物では……あ」

回りくどく粘り強い女がふと、なにか思い出した顔をした。一瞬悪い魔女の笑みをやめてそれなりに素っばい表情を覗かせ、ズボンの左のポケットに手を差し入れる。

取り出した時には、棒付きキャンディが一本、指先につままれていた。すこし前に鼻にやっていたものだが、奥にひとつだけ残っていたらしい。本人も半信半疑の顔をしつつ、イドが鼻にそれを勧めた。

「……つまらないものだが。おひとついかがかな」

むっ、と鼻が眉根を寄せる。そして躊躇なく手を伸ばして受け取る。

「こんなものでは誤魔化されないよ。女子供じゃないんだから」この決まり文句、毎度思うが彼女は一体自分をなにに分類しているのだろうか。

不機嫌な顔でぶつくさ言いながらも、紙を剥いて鉛を口に入れば、臬の表情は目に見えて和んだ。ちなみに棒が付いている鉛は付いていないものより彼女の中でレアリティが高い。

「もつとないっ」

呑気そうな顔でさっそく欲深い発言をする王様。せめて食べ終わってから聞けと言いたい。

「すまない。真正正銘、これが最後だった。持ち込めるものには

限りがあつて……今日は、手荷物は少なめの日だね。ご期待に添えず申し訳ない」

どこかほっとしたような様子でそう詫びているイドに、臬はこつくり頷いた。鉛を含んで頬が膨れている。

「そっかあ。えーと、なんの話してたっけ。あ、そうそう。ねえ、この石くれないかなあ？だめ？」

まだ諦めてはいないが明らかに態度は軟化した臬。山の天気より変わりやすい機嫌である。この調子なのですぐ他人に騙されるのは事実で、口のうまい嘘つきにはすぐ引っかけられる。根は大らかで気のいい王様なのでなおのことだ。危なっかしいことこの上ない。

イドはその点、契約事には案外フェアなので鼻に損をさせたこととはなく、彼もそれなりに気楽に構えている。基本的には。

知恵者と名高き森の魔女は棒付きキャンディをくわえたまま、またしげしげと寶石を眺め始めている。しかし鉛が口に入っている分、そちらに明らかに気を取られており表情も緩い。イドが返事をする前にもごもごまた喋り出している。

「これきれいだね。すごく……ええと……魅惑的。特別なものなんだろう？かなり。いいなあ。中で星が光ってる。触つてみたいなあ。こんなの見たことないよ。じつとこつちを見るみたい」

「お褒めにあずかり光栄だ。あなたはお気に召すだろうと思つたし、これもあなたを好くと思つた。ただ譲るのならば、約束をみつ。ひとつ、基本的には必ず箱に入れたままにして欲しい。ふた

つ、出す時は所定の手順を守って欲しい。みつつ、他の誰にも見せてはいけない」

「くれるの!？」

「いや今のはあくまでお譲りする場合の話であって、まだそこまでは決まっていなかったのではないかな。私の記憶では。違つただろうか」

きらきらした宝石の輝きを瞳に宿したままの梟に見つめられてはまた敗色濃厚になってくるイド。トワイルイトは溜息をつく。そしてまたおねだりポーズになった梟の肘がテーブルに当たつた振動で、カードの塔がばらばらと崩れたのを機に席を立つた。

つまらなそうな顔をして、テーブルを回って向かいのイドの傍まで近付く。彼女たちは話に夢中になっており彼には終始目もくれない。ポケットに左手をつつこんだまま、ちよいちよい、と右手の指でイドの肩をつついて、声をかける。

「あんな」

「なんだろうさ」

「死ね。人が話しかけたら即座にそれか」

取り澄ましていた表情を崩して一気に不機嫌になつていたイドだが、彼がそう言うとますます柳眉を逆立てた。

「貴様こそなんなのだ！わざわざ他人の会話を割り込んでまで言いたい一言がそれか！お前が死ぬね！」

「お前ほんつと損な性格だよな！人が見兼ねてちつとアドバイスでもしてやろうかと思う端からそれか！たまにやあ愛想良く素直

にハイと返事しろや！」

腹を立てた彼にそう言われても、イドは感じ悪く一笑に付すだけだった。

「貴様に振る愛想なんぞ持ち合わせておらんわ。余るなら犬にでもくれてやる」

憎つたらしいその嘲笑に上から指を突き付けてトワイルイトは直感のままに決めつけた。

「そーゆーてめえは犬に咬まれるタイプだろ！無駄に吠えられつだろ！下手すると理由もなく追い掛けられる！絶対そうだろ！なあ！」

「無根拠かつ断定的な言いがかりはやめてもらおうか！」

「語るに落ちてるんじやねーか！ほんつとてめえ話めれば綻ぶタイプの揺るぎなきアホだな！なんでそこで黙れないの？アホだからか？アホなんだな？アッホらし」

嘲り返されてイドはぎつと拳を握つてこちらを睨み上げた。ものすごい早口で捲し立て始める。

「貴様に黙らされるくらいなら死んだ方が幾らかマシだつ！従つて舌を噛むのではなく逆転に賭けて最後までなにか話そうと思ろ！私を黙らせたければ喉でも潰すんだな！だが口だけになつても喋つてやる、猫のないにやにや笑いがあるならば私のいないそれだつてありえるだろうか！昼夜問わず喋り続けてやる！断固退く気はないぞ！」

えらい剣幕だが語るに落ちてている。呆れて応じる。

「その気持ちはまあ俺にもわかるが破れかぶれすぎだろ。たまにゃあ上手いこと黙秘権使えやババア。あと割と窮地だと認めてんな。犬怖いんかい」

「むきよんこな……無根拠な言いがかり——」

「囁んでるぞ。ガチ壁際か。タオル投げて貰えよ。小夜ちゃん呼んできたるか？」

彼がここにいない娘のことに触れたのを機としたのか、それとも単にそのあたりで目の前の小競り合いに飽きたというだけの話か、頬杖ついて鉛をしゃぶっていた梟が若干不満げな声を上げる。

「なあー。なんの話なの」

トワイライトは如才なく頷き応じた。

「あー。この人が先程から便所に行きたそうなのでこっちだよと教えてやりたくて」

「死ぬ!!」

気軽に指差されたイドは立ち上がって罵声を発するが、梟は納得顔になり微笑んだ。

「なんだ井戸のそうなのか？行つてこい行つてこい。我慢は体に良くない。チビの家なら何度も来てるのにおっかしいのー。迷うほど広くない！勝手に使えばいいの。おかしな話！」

手招きみたいに右手を振つて、王様は寛大に雉撃ちへの赴きを認めたが、イドは真っ赤になってそれを拒否する。胸ぐらを掴む勢いでこちらへと詰め寄りつつも必死の形相で梟の方を向いたり忙しないことこの上ない。

「断じて違うつ！取り消せ貴様不名誉にも程がある！梟殿誤解だつ！」

「なんでー？別に気にするなよ。行つてきなよ待つてるから」

「だからそれは誤解だつ！この男の口から出任せを信じてはいけない！」

「ほんとに行きたくないの？行つてきていいんだぞ？」

「行かない何故なら行く必要がないから行かないったら行かない」
悪霊退散の呪文みたいにぶつぶつ言われて、鉛をくわえた梟はきよんとんと首を傾げた。

「時間かかっても待つてるよ？」

「そのような用事断固持ち合わせていないつ！」

ほぼ悲鳴を上げているイドは無視してトワイライトは横からしれつと口を挟む。

「今だけ期間限定無料、あとで貸してつて言われたら有料にしませす」

「借らない!!元はと言えば貴様が」

ぐわつと牙剥くイドはまたあっさり無視されて、

「あーじゃあ只のうちに私行つてこよーつと。賢い！悪いな井戸の！早い者勝ち！」

気楽な王様はさっさと部屋から出て行つた。取り残された女が怒り狂つてこちらへと喚き散らしてくる。

「貴様なんのつもりだ喧嘩売つてるのか言い値で買うぞとにかく死ぬ死ぬ即座に死ぬ!!死んで詫びても許さない!!八つ裂きの上

晒し首にしてやる!! 四辻の下で踏まれ続ける!!」

トワイライトはやる気なく耳を掻き、「うっせーな。助けてやっただらうが」

「なんの謂れもなく信じ難い窮地に立たされたわ!! いきなり人をどこに突き落とすのだ!! 人道を弁えろ!!」

「あなたに人道語られる程俺も落ちてはおらんわな。あとお前と俺の間なんかそんなヌルい戦争条約的なもんあったか。ついでに便所に落ちたらそりゃしんどいな」

相手がボルテージを上げるのに反比例してこちらは気急ぐ話すがイドはまだまだ冷却しない様子だった。髪を振り乱して叫んでいる。

「お前は地獄に堕ちろ!!」

溜息をつき、眼を半分下ろしてトワイライトは片手を上げた。

「あーなんの話したかったか忘れるわ。ほんつとあんためんどくさいな。一言うと百返ってくる。そのうち九十九無駄。張り切るなババア会話はキヤッチボールだぞそのまま素直に投げ返せ、な」

「お前にだけは言われたくないっ!」

「臍はなんでもすぐ忘れっから不名誉だかなんだかのことはあんたももう水に流せ。便所だけに。まあうちのは汲み取りだが」

「お前がそっちに持って行くんだらうが!!」

憤懣やる方ない絶叫を上げるイドへともう一度嘆息してみせる。肩越しに親指を向け、入口の方を適当に指して彼は言い切った。

「まあ冗談は置いといて、実際帰ってきたら忘れてるわな。賭けてもいい。だから頭冷やして俺の話聞く? 俺様からの真つ当な御意見なんだけど。岡目八目つてやつよ。つーかもう戻るな、聞くら臍もない間の方がいいぜ」

ひよつとするとそもそも手洗いどころかまったく違つところへ行つた可能性もあるが、そうでないと仮定して話してみる。イドはまだまだささくれ立つた顔つきだったが、渋々ながらも喚くのはやめた。拳の中に言い足りない分を捻り潰すような仕草をしつつ、不機嫌に呟いてくる。

「……なんだ」

「いやさ、あんたいつもあいつに色々強請り取られてるけどよ。それもどうなのかなつて思つてよ」

座りなおしながら彼がそう言うのと、それに倣うイドはものすごく疑わしい目の色でこちらを見た。

「私から色々強請り取るのはむしろお前ではないのか?」

「まあそれは置いとけや。あんた贋作作るんだろ? その石とかも、ちよちよつと偽物作ればいいじゃん。あいつ絶対見分けられんぜ」「ふざけるな!」

トワイライトが軽く言つた瞬間、イドはいきなり激昂した。差し向かいからこちらの目の前へと石の入つた小箱を突きつけたかと思うと、さらに怒気を強めて続ける。

「これをなんだと思つてる! 見る者見る者散々殺して最終的には三國間での戦争まで引き起こした傾国だぞ! そんな雑な贋作作る

わけないだろうがっ！」

「ンなもん鼻に見せたら欲しがるに決まってるじゃねーか……
っ！か明らかに呪われてる俺んちに持つてくるなヤク」

目の前の宝石を忌避して顔を背けつつ、彼は呆れて応じたのだが相手はあまり聞いていない様子だった。憤りに満ちた顔で話し続けている。先程までとはまた違う、生真面目そうな怒りを目の中に滾らせて。

「大体、私の贋作は……本物となにひとつ変わらない！作るなら全く同じものを作る！鼻だろうがお前だろうが、誰にも見分けられんわ！馬鹿にされたものだよ本当に！私も、この石も！極めて不愉快だ！」

「そーかよ。そりゃすまん。生業軽んじたのは悪かったぜ。謝る」
相手のそのプライドを逆撫でするのは不本意であったので、トワイライトは白けたふうを装いつつも素直に謝罪し、続けた。

「でもさ……それならそれで、いいじゃん。贋作の方であいつにやれよ。完璧な偽物なんだろ。それならみんな幸せじゃん」

「この河馬」
「河馬あ!?」

ぼつんと放り出された言葉に思わず声が裏返った。理不尽な怒りからられて今度はこちらが相手へと詰め寄る。

「どっから出てきた！俺ア人間だ言われても騙蝠だっ！河馬ってどっから出た悪口だ！」

追及を受けたところで取り合わず、不機嫌極まりない顔でイド

は吐き捨てるだけだった。

「やかましい。お前はあの河馬と同じだ！私は飛行鬼ではない。ルビーの女王だと？それはなにかの解決になるのか？なぜあいつは納得するのだ？いつだって甚だ疑問だった！」

喋りながら耳に入る自分の言葉に怒りを強めていく。そんな調子で、彼女は続けた。

「本物を手に入れられないのに、なぜそんなもので心から満足できる。孤独を癒され渴望の旅から許されることができると。わからない。私にはわからない」

最後の方は声が震えていたようにも思える。そう繰り返して、イドは昂ぶった感情を抑えようとしたのか微かに吐息を漏らした。そしてこちらを改めてきつく睨んで唾棄するように言った。

「松葉でも齧って永遠に冬眠しろ。忘々しい河馬め」

この女がそこまで河馬を憎む理由がわからないが、また河馬の生態とはそんなものだっただろうかと疑問が残ったが、彼が口を挟むタイミングを見つけられずにいるままに、イドは憎々しくこちらへ指先を向け、唸るような声を出す。

「とにかく私は……そんなものであの鼻を騙す気はない。ふたつと無いから素晴らしいのだ。複製できるからといって複製したらなんの意味もないだろうが！しかも都合良く他人に譲る為という浅薄な理由で！馬鹿にしている。私ではなくこの石に謝れ」

「石にかい」

呆れてトワイライトが突っ込むがイドは怯むどころか更に

怒った。

「銘持ちの姫だぞ!! 貴様ごときには千回死んでも名乗って聞かせる価値もない! もう嫌だ見せたくない穢れる今すぐ私の柵に戻したい」

「悪かった悪かった俺が悪かったはいはい悪かったですよごめんね!」

最後の方には完全に拗ねて悔し涙の気配すら漂わせ始めるイド、もとい彼女が胸元に庇うようにした寶石へ雑な謝罪を早口でぶん投げるトワイライト。渋っ面での言葉は投げやりすぎて欠片も意味を持たなかったらしい。少なくとも持ち主はそう判断した模様で、彼へと恨みがましい一瞥を投げ、

「死ねはいいのに」

ぼそつと呟かれるが無視して、トワイライトは別に気になつたことを訊いた。小箱の中に収まった青い姫君を指差してみる。

「俺はつちりこの方見ちゃってるけどやはい? 呪われる?」

今はイドの胸に抱かれて、その姿は見えない。だが彼がそう尋ねたことを受けて、彼女は隠していた硝子面をこちらへと向けた。「知らん。そのうち私を殺してでも奪い取りたくなくなるかもな。眠れぬ夜には気を付ける。ふとこいつの美しさを思い出さんようにな。魅入られれば善良な靴屋の次男坊が領主の奥方を色々あった挙句に刺し殺したりもするぞ。まあお前はあまりそういうたちじゃないかな」

そんなことを囁くうちに多少機嫌が治つたらしい。毎度振れ幅

の大きい女だ。瞳の中に面白がるような光を浮かべ、イドは唇の端を上げた。

「そもそも今は封印越しだし。一応言っておくが、梟にいくら可愛らしくせがまれても開けられないからな。今日はまだ顔見せの段階だ。譲る用意はしていない。欺瞞が剥がれたら一気に帳尻が合わなくなつて物語が破綻するぞ。こういうものはこっそり持ち込むのにも一苦勞なんだ」

箱の前には洒落た細工の、しかしどのようにして開けるのかまったく想像のつかない掛け金がひとつ、ついている。銀色の金属製。それは優美なもので、美しい誰かを閉じ込めるためではなくただ相応しく飾るだけのちよつとした装飾品なのだ。イドなら澄まして説き伏せそうだった。そして実際、石はそう悪い気分ではなさそうにも見える。多少なり退屈はしているのかもしれないが。

目に見えるものはその程度で、イドが一般常識のような顔で話すことの意味などさっぱりわからないが、トワイライトはとりあえず気になったことだけ確認する。

「梟は?」

もし彼女のものになつたとしたら、きっと箱を開けるに違いない。魅入られたりするのだろうか。あの梟が。まさか。

「見くびるなよ」

イドは短く発して、梟については心配ないと態度で示した。箱をかざし、片目を細め付け足す。

「三つの約束を守ってもらえればね……禍は招かないさ。骨董店で入手した小動物を飼うより難しくはない約束だと思っただけ。とにかく、他の誰にも見せちゃ駄目だ。あの傾国が暴れ出したら本当に争奪戦の連鎖になるぞ」

からかうような目つきで、気安く語るイド。

「この物語がめちゃくちゃになるくらい戦争が起きる。あれが梟の手を離れ、剥き出しで森の外に出て行ったのなら確実だ。カラクリ玩具みたいにはばん死ねず人間が。自身は指一本動かさず、あの視線ひとつでまあ、殺すこと殺すこと。なお彼女の手元にあるということを知られば、決闘の申し込みはさぞ増えるだろうな。どう？賑やかな生活」

「やつぱりいらん、そんな物騒な石持つて帰ってくれよ」

辟易してトワイライトは呻いた。なぜ世界にこれ以上お化けを増やすのか。自分のような半端者の肩身が狭くなる一方だ。

彼が梟と知り合つてこの方、彼女の領地は基本的に平穩で本格的な侵略を受けたことはない。ちらほら聞いたそれ以前の話から彼女は怒るとヤバいという漠然とした認識だけ持っている。

梟を傷つけ得るのは彼女が受け入れたものだけだ。敵対するものならば彼女は飛来する弾丸さえも視覚で捉えて打ち落とす。この地に根差し、この地を護る場合において、その守りの堅さと鉤爪の逞さは必ず相手を上回ると約束されている、らしい。魔法のことなどよくわからない。興味がないわけではないが、梟は説明が下手すぎる。

イドは小馬鹿にした顔でにやりと笑った。

「そこがいいんじゃないか。わからんやつだなあ。その傍迷惑さがこの小悪魔のかわいいところだろ」

「小悪魔じゃねーよ地獄の大公みたいにもんじゃねえか。やめろ関わりたくない。ほんとにな、あんたの腕前をどうのこうのは別としてよう、子供に子供の玩具を与えようぜ。鉛一本で懐柔できる女だぞ。わざわざそんな御大層な曰くつきの品物じゃなくてもいいんだって……どうせ値打ちわかつてねーって。変なもん見せんよな、ほんとによ。めんどくせえ」

彼が頭を掻いてぼやくのを、イドは黙って聞いている。そしてふん、と鼻で笑う。その眼差しには美学を解さない者への軽蔑があり、また河馬めと言われた気がした。

真作と鷹作。よく似たなにかが増える話。なにか、ひっかかる。無秩序に散らばった記憶の細片。別に本筋には関係のないことだとは思いつつも、トワイライトは臙その糸を手繰ってみた。それは水底から伸びていた。これは、なんだろう。

「斧の話……」

昨日見た夢について急に思い出すのと似ている。それくらいどうでもいい話だった。ぼんやり口に出したのは単に相手がこの女だったからだ。この女は御伽話が好きだから、素朴な疑問をすぐ解消してくれるかと思っただけ。

「あれって、三挺とも返ってくるんだっけ？金と銀を貰う印象だけ残ってるけど。鉄の斧って常に落ちたままか？水の向こうに

行つたつきり？」

その言葉を受けて。イドは予想外の反応を見せた。唇を歪め、顔をしかめるようにして笑みを浮かべる。他者を攻撃するふうを装った自嘲に見えた。鋭く囁いてくる。

「皮肉か？」

「いや、ふと思ひ出したつつか、わかんなくなつたから言つただけで。別にどっちゆうこたあねえけど。え、なんなの。地雷かよ。あんたもよくわかんねえなあ」

「お前のそういうところが心底嫌いだ。軽骨者が舌禍で滅びる類の寓話もついでに思ひ出したらどうだ？」

剣呑な気配を言葉に含ませつも彼女はまだ笑んでいる。攻撃的な、感じの悪い微笑みはいつもながらのものだったが、一抹の後ろめたさがこちらの口の中にも溶け残っている。トワイライトは呆れ顔で、嘆息した。

「だから深い意味はなかつたんだけど……」

先の発言については本当に、鎌掛けでもなんでもなかつたが、イドはどこかに痛みを覚えたらしかつた。意図はどうあれ、ちらつかせたのが同じ刃物でも斧だったのが良くないのか。影を踏まれただけで寝込むような繊細さをこの女時折見せることがある。平素凶太いくせに。嫌味たらしい薄ら笑いは、なにを覆い隠す仮面なのだろうか。

そこまで考えて、結局、トワイライトはそっぽを向いてぼそりと言つた。

「ごめんって」

罪作りな石ころに謝つたよりは、ましな気持ちだつたのだがイドは聞いていたのかいなかつたのか。苦味を帯びた笑みはそのままだに、こちらからはすこし視線をずらして静かに語っている。独り言に近い口調。

「……三挺とも返ってくる。が、無欲な正直者が金銀だけ貰い強欲な嘘つきはすべて失うと思つている者も多いのではないか。金銀があれば古臭い仕事道具がなくても別に困らないものな。新しいものを用立てればいいだけだ。その場合は両者とも、鉄の斧は境界線の向こう側に、沈んだままだ」

その水底を想つてか、瞳の中にぞつとするような深遠を覗かせてイドは囁き声で結んだ。溜息のようだった。

「拾い上げられない」

トワイライトは多少迷つたが、イドの持つ小箱を指で示した。そこでやめてもよかつたのだが、そうした。性格の歪んだ笑顔の下で、彼女がひどく悲嘆しているように見えたからだ。

「でもそれは本物なんだろう？」

「本の中の登場人物がなにをしているか気になつたことはないか？」

「は？」

突如明後日の方角から質問を投げられ、反射的に問の抜けた声で問い返す。慰めようと試みたのだから、振り払われること怒り出すこと空気を読まず長つたらしい自慢が始まること、その他あ

る程度の相手の反応については覚悟していたのだが。

彼女はいつの間にか笑みを消し、平坦な顔になっていた。起伏がないだけで別に穏やかでも安らかでもない、ただ得体の知れない平らかさでこちらを見ている。例えば地底湖。月明かりもない広大な空間の真ん中、深い深い水の上にひとり小舟で座らされたとして、いかに波風がないからといって心落ち着く人間がいるだろうか。

対峙した女はそんな雰囲気で、口元だけが動き、言葉が消らかに溢れている。薄い唇は伶俐な印象であり、口紅はいつも地味なものを用いている。そんなことにふと気を取られる。

「自分が見ていない間。本の筋書きは本当にそのままなのだろうか」と疑ったことはないか。閉じた頁の間で文字たちは勝手に蠢き奇怪な変貌を遂げ、よく知っているはずの物語が知らない間に途轍もなく恐ろしいことになっているのではと疑うことはないか。開けばすぐさま元に戻り、登場人物は何食わぬ顔で普段通りを演じながら愚かなこちらを嘲笑っているのではないかと疑心に駆られることはないか？ふと思ひ出せばぞっとして飛び起き夜も眠れなくなるような強烈な疑念に囚われることは？」

独り言ではなくこちらに語りかけている。笑うでもなく、砂時計の中の細い細いくびれを迷いなく落ちていく砂を思わせる滑らかな調子で。一方向にとめどなく流れていくだけ。強引ではないが揺るぎない。たとえ逆さに引つ繰り返したとしても、最後まで断じて止まらない言葉が流れ続ける。

「いかに隙を突きどんなに素早く本を開いたとしても。彼らはそれ以上の過敏さで察知しており元に戻るのでは。頁の裏側ではないが起こっている？本をばらばらに解体してみたり、一文字ずつ切り離し隔離してみたり、その結果やはり意味がわからなくなりほら見ろこいつらは結託して私を欺いていたんだと確信し秘密を暴いたぞと勝ち誇るべき相手がそもそも誰もいなくなつたことに気付き不可解な敗北感だけが募り自分はそんなことを証明したかったわけではないとほんやり思い意味不明の残骸を前に途方に暮れたことは？ないか？」

抑揚なく淀みもなくなんの必死さもないつまり決まり切つてただ退屈なだけの事柄を語る口調で彼女はそんなことを尋ねた。その顔つきがあまりに平静であり素面だつたので逆に非常に怖かった。トワイライトはすこしだけ黙り、慎重に言葉を選ぼうと思ひ、落ち着き払つた声でゆつくり提言した。

「それは、ちよつと、病気なんじゃないかな」

腰が引けた分のバランスでなんとなく両手を前に出しつつやんわり言つたのだがイドはこれといつて取り合わない。喋り続けている。据わつた感じの眼でじつと見られて背中あたりがぞわぞわする。

「一言一句違わず文章を書き写せば……自分はその本の作者になれる？では、輪転機は。違ふ。世に出る、或いは単に書かれるまですれば。そうすればそれは私のものにできるか？なりたいたいの

に成り代わることができる?……それも、違う。誰も困らなかつたとしても、辻褄は合つたとしても、私だけは本来返すべき鉄の斧があつたことを覚えている……」

詰め寄つて来たなら椅子ごと後ずされるのだが相手は微動だにしないので下手に動けない。怖い。なるだけ穏やかな声を出して彼は論じた。しかし自信がないので話しながら無駄に頷いているのを自覚する。

「それは偏執狂つていうか。なんていうか、まあ、ちよつと、うん。妄想的なんじゃないかな。ちよつと気分転換に芝生で犬と遊ぶとか、そういうことしてみたらどうか。あ、そうか犬怖いのか。ごめん。えーと、じゃあ、なんだろ……とにかくあれだ。医者には相談したことある?俺よりもきつと実のある話をしてくれるんじゃないかな。経験豊富かつ親身になつてくれる、感じのいいやつを探そう。なんだつたら付き添つてやるから。な」

「だから人を気軽に病氣扱いするな。なかが悲しくてお前に付き添われて頭の病院に行かねばならんだ。阿呆らしい」

イドが多少むすつとした顔になつたので若干ほつとほつと、しかしまだ尻のあたりに座りの悪いものを拭い去れずに宥めるように言葉をかける。

「いや、一歩引いた人間の方がいいかなと……小夜ちゃんだと氣の毒つつか、そういうのに心底関わりと家族もだんだん一緒にやられるつつか、感染るからな。頭の病氣は」

「妄想的なのはお前だ。悪意的な思い込みで決めつけて私を病氣

に仕立て上げようとしているだけじゃないか。パラノイアはお前だ、お前」

一巨箱を机に置いたイドから言葉に合わせてずけずけ指差され、しかし腹は立てずにできるだけ親切そうな口ふりを心掛けてトワイライトは頷いた。乗りかかった船なので面倒を見ねばと思つていた。

「あーうん、そうだな。俺がそれだ。医者にかかるよ。だから悪いけどあんた付き添いで一緒に来てよ。それで、ついでに医者と世間話とかしよう。俺の悪口とかでいいからな。なんでも素直に話していいんだぜ。あとほら、さっきの本を細切れにする話な。あれも話そうな」

真面目な顔で優しく声を掛けてやつたのに相手はなぜかますます眉間に皺を刻んでいる。半眼になつて今度は机の上を指先で繰り返して叩いている。痲痺持ちのピアノ弾きみたいな仕草で。

「つくづく小癩に障るやつだな。要するに私がおかしいと言いたいんだろ?うがしつこい」

「自覚しにくいからな?そういう病氣は。自分はどうなのかな?つて、ときにはちよつと疑つてみるのも大事つつか。いや、疑いすぎないんだぞ。ちよつと省みるだけでいいからな。とにかく怖くないから医者に行こう。きつと薬とかもなんかあるから。そうしようよ」

「そういう的外れかつ執拗な猜疑の目こそが心底鬱陶しく……どいつもこいつも私を馬鹿にするので我慢ならず目の届く範囲のあ

りとあらゆる印刷物に存在する人物の両眼をいかに素早くはみ出さず丁寧りようめに黒く塗りつぶすかということだけに没頭していた時期もあり」

「うわあやめろやめろ想像したゾツとした鳥肌立った怖いキモいやめる洒落にならん!!」

ふたつの楕円だえんの空洞を抱えた無数の顔顔顔顔を思い浮かべむしろ塗りつぶされた目ではなくその笑みの形に開いた口の中にこそ無限の暗黒を見た気がしてトワイライトが悲鳴を上げていると、真顔だったイドはまたむすつとした様子になって頬杖をついた。

「馬鹿げてる。話にならん」

「こつちだつて聞きたくなかつたよんな話……」

ドン引きして呻く彼に、頬杖の手で机をびしゃりと打ったイドが声の調子を高める。

「お前が振つたんだろぅが！」

「脈絡ねえんだよ！そつちが！」

「脈絡をすつ飛ばして急所を刺してくるのはお前だつ！今後一生、忘れた頃に筆筈たんすの角に小指ぶつけて悶絶するよう取り計らつてやるから覚えとけ！」

「だから悪かつたつつてんだろ！地味に嫌な呪いかけんな！ほんつと嫌なババアだなつかそれ覚えてたら一生発動しねえんじやねえのか馬鹿だろばーかばーか！」

心配してやつてもさっぱり話が通じない女へ、気の毒な人を見

る目をやめて喚き返しながら、歩み寄りむみは難しいと考えトワイライトは己を戒めることにした。同情して損した。斜め上だか下だか知らないが変なところに居直りすぎである。偏執うかつには迂闊に關わつてはいけないのだつた。

深呼吸のふりをして本日一番深い溜息をつく。更生への道は遠い。相手は相変わらず可愛げのない態度で歯齧みはがしている。

無視して、トワイライトは机の上に散らばっていたカードを手早く束なばに集めた。端を揃えて、ポケットに突っ込む。赤と黒。そしてここにはない色がいやに臉まかたの裏に焼き付いた。

ちらりと視線を上げて机の上を見る。なるべく目に入れないようにしていたものを。

「その石、とりあえずあんたが持つてつちまつたつてことは、その世界からは無くなつたのか？」

箱の中で青く微笑む宝石は、謎めいた眼差しで彼を見ている。星の瞳が瞬またたいている。手招きされたようにも感じたが、気分は平靜のまま操られはしなかつた。他を当たれ、と胸中でトワイライトは呟いた。この女と違つて小娘こむすめにくらくら来る趣味はないのである。

彼がそんな結論に至つてゐることは露知らず。類稀たぐいまれなる馬鹿を見たという顔つきでこちらへと一瞥をくれ、

「当たり前だろうが。大戦の混乱で失われるところを頂いた。奪われるならばと破壊しようとした愚か者がいたので、傷付く前に貰つた」

一度持ち上げた小箱をまたことり、と机の上に置き、そんなことを言うイド。

「その後は採めなかつたか？」

何の気なしにトワイライトがそう疑問を呈すると、彼女は肩をすくめた。

「採めるものにも。もうその物語自体ないし」

「ない？」

「石を引っこ抜くのに物語ひとつ私が潰した。あの頃は私も若かったというか、色々荒んでいったというか、まあそういうことも儘あったのだ」

さらつとなにか、とんでもないことを口にする女。

それについて彼が頭を整理しようとしている間に、多少気まずそうに咳払いしてイドは頬を掻いた。実にその程度の気まずさで、発言の重さには相応しからぬ態度だった。

「今はそんな乱暴なことはしないぞ。それなりに後悔もしている……なので、この石は非常に貴重なものなのだ！世界ひとつ分！わかつたか！」

「ちよつと待ておい！」

正当な主張をしていると信じ切った面持ちで箱の中の石を指差すイドに叫び返した瞬間、

「たっだいまー」

なんの予告もなく梟が窓から飛び込んできた。開けていた窓、その窓枠の上部を片手で掴んで足から滑り込んでくる。赤い衣が

炎のように躍る。

着地した彼女がテーブルの上を覗き込むより一瞬早く、トワイライトは迷わずポケットから引つ張り出したハンカチを投げて小箱に被せていた。慌てたイドがもたつき仕舞うよりそちの方がましだと思つたので。ちなみにイドはやばいという顔だけしており、手を動かすには至っていなかつた。鈍臭い。

「花を摘んできたよ。井戸のにやろうかと……ん、うまく結べない」

「貸して」

雑然とした花束を抱えて、紐代わりの蔦に苦戦している梟。彼がそれを手直ししてやる間に、梟は自分ひとりで全部作り上げた顔をしてイドに笑みを向けた。

「それやる。帰って小夜啼鳥にあげてもいいよ。私からつて言つてね」

空になったチョコレート箱を除けば、テーブルの上にはお茶のカップしか出ていないので、ハンカチの下になにかいいもの（もちろん、食べるものだ）があるのではないかと梟が睨まなければいいなと思いつつもトワイライトは手早く作業を終える。そして花束を面倒臭そうにイドに突き出した。あくまでこちらのお客様からであるという姿勢でついでに喧嘩を投げ売りする目つき。相手もつまらなそうな態度で、受け取った。直接梟から貰いたかつたという顔だった。

「今度は小夜啼鳥も連れてくるんだぞ！井戸のひとりじゃ、つまらない。なんであいつ来ないの！」

イドの手土産。凝った細工の小さいチョコレートの数々。その粗方は約一名が平らげたのだが細かい格子に区切られた大きな箱はなお甘い香りを馥郁として放つており、梟はまたなにか残りが無いたろうかと疑つて、引つ繰り返したり升目を数えたりしていたがやがて諦めてそんなことを言う。ハンカチには目もくれない。

そんな様子を微笑ましげに眺め、イドは穏やかに言った。

「申し訳ないが、今日は少々都合が悪かったのだ。気難しい連れがいたのでね。あれには遠慮して貰った」

「連れ？」

梟はきよんとして、首を傾げた。

「井戸の、ひとりなのに、おつかしな話。ちゃんと小夜啼鳥連れてこい！留守番かわいそう。次ひとりで来たら、怒る」

——案の定、石のことなど綺麗さっぱり忘れていた。

イドが優しげに頷く。相変わらず微笑んではいるが、その時は悪い魔女の顔よりもやや素直そうに見えた。

「わかった。お約束する」

「約束破つたら、指切つて、針千本飲ます！」

彼が昔教えた作法に乗っ取り小指を突き出す梟に、イドは苦笑して応じている。

「それは手厳しい。ご勘弁願いたいものだ」

彼女が梟の白い指に、手袋越しの黒い指先を冗談めかした角度で絡めるのを眺めて。なんとなく意外な気がしてトワイライトは声を上げた。魔女同士の誓約がそんなふうにはのぼのと交わされ

るのは、変な感じだった。

「なあ、暇人」

彼は別に間に割つて入りたかったわけでもないのだが。イドはそうは取らなかつたらしく、子供じみた嫌がらせにうんざりしたという目つきでじろつとこちらを見やった。忌々しげに唸っている。

「斬新だな。自分で自分に話しかけるのか？」

「うぜえ死ね。お前以上の暇人知らん。つくづく素直に返事しねえババアだなこいつ」

「お前が死ね！なんなんだ一体！」

そう怒鳴られて振り返れば、これといつてなにか言いたかったわけでもなかつた。なので、トワイライトはとりあえず思いついたことを口にする。適当に自分のこめかみのあたりを指差す。視線はイドへとくれたまま。

「いや、ここんとこに白髪かな」

「死ね!!腐った豚の絞汁で首まで埋まつて溺れ死ね!!」

無根拠な言いがかりに怒声を上げている、イド。なお、梟はとつくに指切りは終わらせてチョコレートの箱のリボンで遊んでいる。

束の間状況を想像してみても眉を顰め、

「どこから出て来るんだその発想」

げんなりしたトワイライトが吹きを漏らすと、イドはざつとこちらを指差す。そのまま、しかめた真顔で一切の淀みもなく言っ

た。

「もし私がお前を適当にもてなす機会があるのだとしたら、とりあえず狭い白い部屋に収容れておこうと考えている。椅子だけは与えてやるが背凭れはなく壁には不規則に移動する棘があり刺さる為一切寄りかかれない。室内は四六時中高出力の照明で隈なく照らし、夜間には私がどうでもいい話を延々話しそれに対する返答を常に要求する。なおその際は照明を直接至近距離から顔に当てる。絶対に寝かせない。排泄に関してはプライバシーと衛生管理を考慮するが光から逃れられるとは思わぬ。食事も適宜普通のものを与えるがそんな状況ではまず食べられるとも思わない。いかなる状態でも渡してから十五分後にすべて下げる。室内で戻しても始末はしないので自己責任」

その一本調子を聞かされても底知れぬ水の下へと誘われる怖気は発生せず、従ってただ呆れ返ってトワイライトはぼやく。「なあお前なんでそんな陰険な性格なの？ 歪みすぎて逆に清々しいと錯覚するときすらあるぞ。なんか昔深刻に嫌なことあったん？なあ」

「壁は通電の方が実際の効果は良いと思うが針の方が具体的に痛みを想像できてお前には鬱陶しいだろうかという程度のささやかな嫌がらせなので、雑と言われれば改善しないでもない」

「それは改善なのか？ 機能的に既に完成してる鼠取りの残酷性上げるのは品質改善って言えるのか？ さっき威力過大についての文句なんか言ってなかったか？ 今お前が言ってるのその類な？ わか

る？」

馬鹿にしきった声音で彼が教えてやつても相手は意に介さない。ただ片眉を上げ自分の思いつきだけ話すのみだ。

「む、貴様蝙蝠だったな。夜間訊問はかえって日中やった方が効くのか？ どちらがきつい？」

「知らねえよ」

心の底から面倒臭くなり溜息をつく。トワイライトが冷めたお茶を口に含む間に、リボンに飽きた梟はとことこ部屋を横切って、台所を漁りに行った。

残念ながら菓子弾切れ——と、言いたいところだが、茶筌筒の中にタフィーが隠してあるのを発見されるのは時間の問題であろう。たまたま昨日拵えたがイドはそんなに欲しがるとも思わないので出さなかった。彼の見る限りは、この女さほどの甘党ではない。出されたものには手をつけるが、美味いとも不味いとも言わないで当然のような顔をして口に運ぶ。ただべたべたしたり、歯にくっつくものはあまり好まない傾向がある。

いつ何時も勝手に手紙を送りつけその日のうちにやって来てはふらつと帰る我儘女。たまには余裕を持って事前にこちらの予定を伺えと言いたくなる。そうすれば胡椒とチーズのクッキーとか、そういうものだって用意されるかもしれないのに。馬鹿なやつである。

さしたる面白みも感じないままそんなことを考えていたトワイライトだったが、梟が離れた隙にやらせるべきこともあった。

イドに目配せると、彼女もすぐ思い出しらしい。というか、もし本当に忘れていたのなら梟となが違うのか。不機嫌顔をやめた女が台所を伺いつつも、そうつとハンカチの下に手を伸ばすのを白けた目で眺める。

さしたる興味もなかったが、白い布の下から鮮やかな露草色が顔を出したとき、ついトワイライトは小声で質問を口にした。そうするよう石に囁かれたわけではなかったと思う。人心を惑わし続けたその美姫は、今は彼女のためだけに誂えられたであろう箱の中で澄ましている。別に欲しいとは思わなかった。なので、むしろ持ち主の方を見ていた。

「その石、名前何てんだ」

その問いを受け取って。

イドはふと、瞳に退廃的な陶醉を浮かべた。ゆるりとそれを広げるようにして、口元に笑みを浮かべる。

——この女のこんな様子は、不気味だが確かに惹きつけられるものがあると苦く認めざるを得ない。心の底でもそりと蠢くように。普段は忘れていた原始的な衝動めいたものが鎌首をもたげて、吸い込まれるように彼女を見つめようとする。そこに捧げようと焼べた分だけ情熱はどこまでも失われる。星空と同じ。背伸びしてあるつたけ手渡して、こちらが冷え切っても相手はなにひとつ変わらず、ただ元通りに冷然と微笑んで言うだけだ。あなたにはわからないわ。そして最後の熱まで奪われる。呪われた寶石に魅入られる者たちが、その運命を踏み違えるのもきつとこうした瞬

間なのだろう。

「教えない……もう誰も知らない。私しか知らない。物語の名は失われ、この石だけが残った。だから今はこの銘こそがあの世界のすべだ。気軽に口にはできるものではない」

そう囁き、他者には決して共有できない、自分だけの恍惚を味わうようにしていた女はほんの少しだけその目つきを正常な範囲に戻した。ぬめりを帯びて蕩けていた金色が僅かでも落ち着けば、魔性も静かにまた気配を隠す。抗い難い引力を発していたあの表情となが違うのか、指摘しろと言われればよくわからなくなるのだが、とにかく彼女はそんな雰囲気で、続けた。声音はからかうようなものになっていた。

「もし誰かに譲るのならば、そのときにだけ銘を明かすつもりだ。すくなくとも、貴様のような甲斐性無しの無礼者には、一生縁のない名だ」

話し終える頃には、例え難く蠱惑的だった様相からはぐつと普段通りに戻っている。手袋を嵌めた指先が箱の硝子蓋をなぞった。人々を誑かし続けた石よりもその手の仕事のほうがずつと艶かしく思えて、迷いながらもトワイライトは質問を口にした。

「世界ひとつ潰したっての、あれ与太か？」

「事実だ」

その口調は端的で、甘く広がる陶醉の気配はもうなかった。

イドは嘆息するような気配だけ見せ、実際にはその代わりに声を出した。

「気に入らないものと気に入るものと……尊いものとどうでもいいものと……愛しいものと、憎々しいものと。とにかくそんなものがだな、よくわからんというか、もう区別が面倒臭くなつて、とりあえず衝動に任せて本質だけ掻き集めていた時期があったのだ。力任せにそんなもの抜き取れば当然物語が維持できなくなる。まあそれでもいいかと思うというか、そんなことさえ思わないというか、まあとにかくあれだ。若気の至り。その当時非常に殺伐としたの。結論として、抑制は大事」

「頭がおかしい」

「おかしいものにも。誰でもそんなものさ」

やや意地悪く微笑んで、イドはそつと小箱をまた内ポケットへと忍ばせた。ちようど戻ってきた梟には見せない角度で。なにも気付いていない彼女へと改めて顔を向けてから、また例の猫撫で声を出す。

「では、梟殿。そろそろお暇申し上げる。今後、すえなが 未長く御壮健であらせられよ」

薄ら笑いの井戸の魔女からそう声をかけられて、森の魔女は怪訝そうに首を捻った。こちらを振り返り、

「なんて言つた？」

「ホーホーばいばい元気でねって」

イドを指して梟が尋ねるのに彼が簡潔に答えてやっていると、回りくどい女はまた機嫌を損ねて怒声を上げた。

「その雑な通訳を解雇かいごしようすこしまともな人間を補佐役へ選び

直されることをお勧めする！」
「蚕かいこがなに？」

相変わらずすつとぼけた顔で梟は問い返しているが、イドはイドで洗しやくめん面を作りつつ、明後日にずれた質問に真面目に答えてやっている。彼女は梟を見たまま、またこちらを指差して、

「あのかわいらしい蛾がは有益だがその男は如何いかなものか……肩を叩くなり首を切るなり、とにかくどこかにおやりなさい。百害あつて一利なしだ。ちよつと芸をするからといって迂闊うかつに餌をやつてはいけない。ずるずると寄生される」

本気の諫言かんげんつぼくぐち言われてむかつと来たので、トワイライトは両手をポケットに突っ込み白けた声音を出した。

「眠たいことぬかしてんじやねえぞババア。寝たけりゃはよ死ぬ。永眠しろや」

斜めに睨んで言い捨てて、不真面目な角度に座り直そうと机を蹴つて椅子ごと後ろへ下がったのだが。

「こうかー」

突如両肩に衝撃が走つてつんのめるように床に蹲うすまった。梟が嬉しそうに背後からぶつ叩いてくれたのである。

「どらーもつと叩こうか！次はどこ？」

やる気満々のつこにこした声を頭にいたに戴きながらも、悲鳴もなく痛みを震えるトワイライトだったが、

「腿ももの外側に全力で膝蹴りをお勧めする。ぼけつと突っ立っているときに忍び寄る感じで」

イドがすかさずほくそ笑む感じじでくだらないアドバイスをし
くさり飛び起きざるを得なくなる。

「死ね！いらんこと教えんな！」

声の調子通り子供っぽくにやけている女に全力で食ってか
かっから、わくわくした顔でじりじり距離を詰めてきている梟
から後ずさる。彼女の全身から、猫が獲物に飛びかかる前の尻振
り運動と同じ類の有り余った期待感が発散されているのがぼ目
に見える。

「ちょっと待つて今のなし。それはなし。忘れて。やつても何も
起こらないし全然面白くないから忘れて」

片手を前に出し及び腰で制止を試みる彼を眺めつつ、イドがま
た調子に乗った感じの声を上げている。指先でにやついた口元を
隠しているのがまたなんとも小物っぽく憎たらしい。

「梟殿。忘れたふりして機会を待たれよ」

「だからやることみみちいんだよ陰湿ババア！しょーもない嫌
がらせばっかすんな！しみつたれ！」

虚無と猜疑に凝り固まって深夜ひとり世界をばらばらに切り
刻んでいた女にしては、くだらなすぎる態度に呆れてトワイライ
トはそう怒鳴る。イドは含み笑いして、ひらひら手を振った。そ
れだけ見れば単に大人気ない変人にしか思えなかった。

なにがどこまで真実なのかは、わからない。

ちらとイドの目を伺ってみたが、その金色は穏やかであり夜
の底へと傾く兆しは見受けられず、澄ました表情だった。硝子越

しの宝石と似ていた。

あなたにはわからないわ、と言う代わりイドは花束を手にとつ
て、その無邪気な香りを軽く吸い込んだ。微笑みは相変わらず謎
めいてはいたが、楽しんでるようだった。

その後。忘れた頃に寝起きにうっかり筆筒の角に小指をぶつけ
て悶絶するたび、トワイライトはあの憎つたらしいにやけ顔を思
い出してひとり悔しがることになるのだが、それが呪いのせいな
のかなんのかは甚だ、不明である。